

幼稚園で展開される「ひとり遊び」についての考察
—観察を通して見える遊び姿の多様性に注目して—

専攻 人間発達教育専攻
コース 教育コミュニケーション
学籍番号 M17008A
氏名 田中 康雄

I. 問題と目的

幼稚園の現場では、社会性の萌芽期である幼児期にひとりである姿を捉えた際、発達面においてリスクがある事を懸念するあまり、ネガティブな行為として評価しすぎる傾向にあるのではないだろうか。Parten(1932)は幼児期の遊びを社会性の観点で捉えた際に「ひとり遊び」を低次に位置付け、Rubin(1982)は「非社会的遊び」と定義した。大内・櫻井(2008)は縦断研究によって、「非社会的遊び」全てが社会的な問題行動に相関があるわけでは無い事を示したが、同時にそれがリスクを予見することについても明らかにした。

ひとり遊びの持つ遊び的側面を評価した場合、ひとり遊びは必ずしもネガティブなものでは無いと筆者は考える。淡野(2008)のようにひとり遊びを社会的リスクという側面で捉えない研究もあるが、「遊び」としての観点を促進する先行研究は十分ではない。現場での保育評価の際、ひとり遊びの姿をリスクと遊び両面の観点を持って適切に評価できるよう、本研究では、自然観察法を用いた観察を行い、幼稚園における自由場面でのひとり遊びの「遊び的側面」の多様な姿を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

観察場面 私立幼稚園の園内での自由場面

観察対象 5歳児男児5名

観察期間 2023年10月～12月の期間中、自由保育場面の多い10時～11時にビデオカメラでの撮影を行った。1日1人、1人につき4回の計20回の観察を行った。

分析手続き 撮影されたデータは文字に起こし、行動毎にセグメント化した。その後、その行動が物理的にひとりの状態で生じたものか否かに分けた。次に、ひとり状態で生じた行動のデータを分析し、似た内容で纏めたものにコードを当てた。似た内容のコードを纏めてカテゴリーや概念生成を行い、生成されたカテゴリーの関係性を「ひとり遊びの遊び的側面を構成する要素」を捉えるために、視覚的に表現するモデルを作成した。

III. 結果

1. 物理的にひとりの時間と複数人での時間

撮影対象全員にひとり遊びの姿が見られたと同時に、観察時間である1時間のうち、過半数以上の時間は複数人との関りを持つ時間を過ごしている事が分かった。ひとり遊び時間が最も長い回で合算44分32秒、最も短い回は0分であった。

2. ひとり遊びに関する多様な姿

観察された姿のうち、ひとり遊びに関する多様な姿は以下のようにまとめられた。

【社会的相互作用を含む姿】 ひとり状態から社会的相互作用を含む行動に移行する姿が確認さ

れた。社会的行動はひとり遊び従事者から行う事もあれば、他者からの介入もあった。ひとりである子も、社会的相互作用が生まれる姿とは、すぐ隣り合わせである事が分かった。

【遊んでいない姿】 ひとり状態の姿の中には**【遊んでいない姿】**と判断せざるを得ない姿もあった。もちろん対象児の内心に完璧には寄り添えない事から、厳密に断定する事はできない。本研究では想像を加えた解釈を極力排除し、客観的な視点から「傍観」と「休憩」に分類した姿をまとめて、遊んでいないと判断した。

【目的のある遊び】<メインプレイ>と、そこから派生する<サブプレイ> ひとり状態で行われる遊び姿をまとめて**【目的のある遊び】**とした。その姿は、観察者にも遊びの目的が分かりやすい<メインプレイ>と、<メインプレイ>中に見られる姿である<サブプレイ>に分けられた。

<メインプレイ>は身体感覚を楽しむ『身体感覚』、注視対象がはっきりしている『観察』、明確な目的をもったひとり状態である『ひとり遊び』に分けられ、『ひとり遊び』の種類として「探索」「制作/構成」「身体表現」「ごっこ遊び」「練習」「ゲーム」の6種類が観察された。

<サブプレイ>は、『小遊び』と『自己調整』とに分けられた。いずれも<メインプレイ>従事中にその姿が見られる。<メインプレイ>中に、途中で違う目的の遊びが挟まれるも、その後元の遊びに戻る姿を『小遊び』とし、その内容によって「動的小遊び」と「静的小遊び」に分類された。<メインプレイ>の遊びの方法や目的を変化させる姿を『自己調整』とし、その内容は「試行錯誤/調整」「方向転換/目的修正」「ゲーム性の創出」に分類できた。

3. <サブプレイ>が発生するきっかけ

<サブプレイ>の生起点から、<サブプレイ

>が発生するきっかけとして「発見/思いつき」「反復」「外部刺激/アフォーダンス」「気分転換」に分けられる要因が観察された。これらの要因は独立しておらず、関連し合っ<サブプレイ>が発生することが観察された。

IV. 考察

5歳児のひとり遊びには社会性を有する要素がいくつも見られた。また、低年齢児の遊びとして扱われる「身体感覚を楽しむ遊び」であっても『自己調整』によって遊びとして豊かになるなど、「ひとり遊び」は誰が、いつ、どの発達段階で遊んでいるかによって多様な姿を見せる事が分かった事で、目の前の姿がどのようなひとり遊びなのか、適切に評価する必要がある事が示された。また、『小遊び』等の<サブプレイ>が発生する姿は、ひとり遊びに従事する幼児の創意工夫や周囲の環境、自身の持つ感性への関心・意欲が表出した姿でもある。尚、これらひとり遊びの豊かな姿は、それに応え得る保育環境が必要であることも考慮すべきである。

V. 結論

ひとり遊びの遊び的側面に着目すると、その多様な姿から社会性のリスクといったネガティブな要素だけでない、様々な価値を含んだ遊び姿が明らかになった。これらは幼稚園教育要領記載内容にも該当する、幼児の育ちにとって重要な姿でもある。

幼児期に社会的な関わりが必要な事は無い。しかし、本研究がひとり遊びの多様な遊びとしての姿を示した事で、実際の保育現場において、保育者がひとり遊びを捉える視点が増え、ひとり遊びの持つ両面を適切に評価する際の一助となる事を期待する。

主任指導教員 中間 玲子
指導教員 中間 玲子